

日本語の「そば」「蕎麦」にまつわる大事な話

～ 国語国字も食育です ～

ほしひかる☆江戸ソバリエ

☆蕎麦の字

まずは街に出てみましょう。

「中華蕎麦」・・・？



【「中華蕎麦」の看板】

近頃、こんな看板をよく目にします。

あまりにも度々見かけますので、ある一軒の店に入りました。なかなかおいしいラーメンでした。そこで肝腎の看板の字について訊いてみました。

すると「ひらがなとか片カナにするより、漢字の蕎麦の方がカッコいいでしょ」と明るく、言われました。

カッコいいというのは、人の名前、アニメ、タトゥーなどで漢字が人気のあるせいでしょうか。これに対して、とくに議論したり、説教したりするつもりはありませんから、苦笑してお店を出ました。

しかし、もともと【蕎麦】という漢字は、75日でスクスク伸びるところから「喬 qiao 効効」という字に草冠を載せてできた字です(『新・みんなの蕎麦文化入門』)。



【蕎麦】



【元正天皇陵】

したがいまして「蕎」の字には蕎麦(そば bacheweet)以外の意味はありません。ましてや小麦粉麵のラーメンに「蕎麦」と書くのは、お蕎麦に対する冒涇でしょう。

この「蕎麦」の字の日本史での初出は『続日本紀』の元正天皇の代です。

日本は国字を發明しなかつた国です。ですから上古、中国へ留学した者たちが彼の国の字を持ち込んで、それを日本語に合せて字としたのです。当時の渡航帰航は命懸けでした。船の半数ちかくが難破して海に沈んだといひます。そんなですから『続日本紀』に採用された「蕎麦」の字には当時の遣唐使たちの命が染みこんでいるのです(『新・みんなの蕎麦文化入門』)。

そうした背景を先ず知っておいた方がいいでしょう。

☆そばの言葉

字はそういうことですが、日本人はいつから言葉で「そば」と言っていたのでしょうか？

先述の『続日本紀』では「くろむぎ(蕎麦)」「おくて(晩稻)」「おおむぎ(大麦)」「こむぎ(小麦)」という呼び方をしています。これは、黒い実の麦のような穀物⇒「くろむぎ蕎麦」、遅れて成熟した稻⇒「おくて晩稻」、麦の種類を分別して⇒「おおむぎ大麦・こむぎ小麦」と呼ぶようになった、という具合に意味のある呼び名、つまり飛鳥・奈良時代には知的な名前を付けるようになっていたのです。

それ以前はといひますと、意味はあるにしてももう少し単純な発想の呼び方だったのでしょう。たとえば、大和から見て、西の端はソッチのツマ(端)⇒「サ・ツマ(薩摩)」、東はアッチのツマ(端)⇒「ア・ヅマ(東)」というように。

さらにそれ以前の弥生時代ではどんな言葉を交わしていたのでしょうか。その記録が少しだけ『魏志倭人伝』に記録されています。それによりますと、邪馬台国の人々は「アイ」と返事をしていたようです。この言葉は本論と直接の関係はありませんが、日常の生々しい様子が想像できますので、紹介しました。ちなみに筆者は北部九州の佐賀が故郷ですが、祖父母の代まで佐賀では「アイ」という返事を日常使っていました。

さらに遡りまして、縄文時代になりますと、彼らはもっと幼稚な言葉で会話していたのでしょう。さながら幼児が「アッアッ」、「ママ」と言うように、少なくとも一語、二語の原始的言葉による呼びかけの会話はあったのでしょう。

たとえばメ(目)、ミミ(耳)、ハナ(鼻)、クチ(口)、テ(手)、アシ(足)、ユビ(指)、ヒ(火)、ミズ(水)、キ(木)、ミ(実)、ハ(葉)、ハナ(花)、カイ(貝)、トリ(鳥)、チ(地)、ヤマ(山)、カワ(川)、ウミ(海)、ハシ(橋)・・・などの一、二語の簡単な言葉は縄文語由来かもしれません。したがいまして適切な見方として、縄文晩期に栽培蕎麦が伝来しているのですから、そのころには「あわ(粟)」、「きび(黍)」とともに、「そば(蕎麦)」と呼んでいたであろうことが想像できます。ただし、なぜ「メ」、なぜ「ミミ」と言ったのか、なぜ「あわ」「きび」「そば」と言ったのかを追うことも面白いことですが、なかなか難しいことですのでこれ以上の言及は控えておきます。

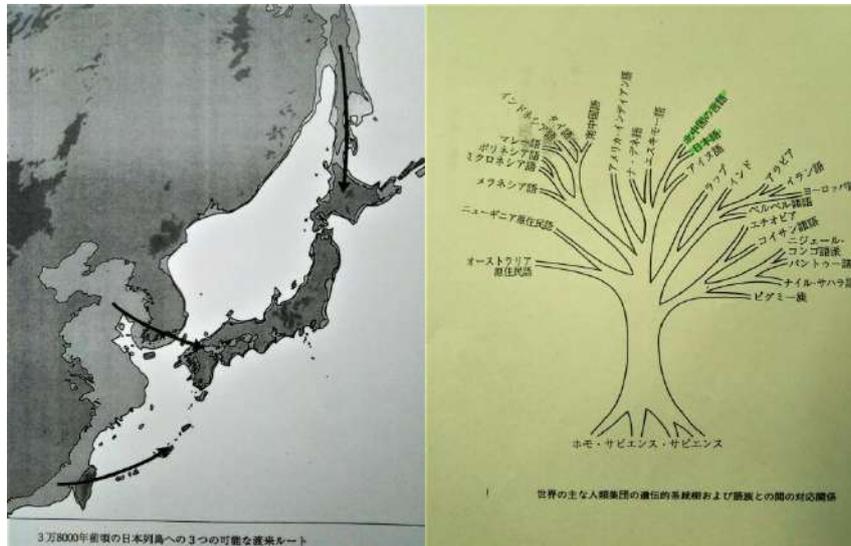
☆日本人と日本語

さて、単語はそうですが、原日本語の、今でいう構造はどうなっていたのでしょうか。これが問題ですが、それには「原日本人はこの列島に何処からやって来たか？」ということを検討しなければなりません。なぜかといいますと、言葉は仲間(民族)の間で通用する手段だからです。しかしながら、その成り立ちが謎といわれる原日本人(日本祖語も)の解明はそう簡単ではありません。

そうであるにしても、原日本人について見ておくことは、日本語の成立のみならず、日本人としての務めであると思います。

そこで、まずは「最初の日本人とは？」です。

人類進化学者の海部陽介は「渡来三ルート」のうち朝鮮半島→対馬→北部九州ルートでやって来た渡来人が最初の日本人、時期は今から3万8000年前ごろとしています。



【渡来三ルート】 【主な人類集団の遺伝的系統樹】

また遺伝子追跡では時期を今から約1万5000～3万年前とされています(カヴァリ=スフォルツァ)が、大筋では海部説と同じだといえます。

そのうえで言語学者の服部四郎は、日本語は朝鮮語、アルタイ諸語との親族関係は遠いものであるとしながらも、その蓋然性はいちばん高いと述べていますが、赤児にみられる蒙古斑のことを思えば納得がいく気がします。

そのアルタイ諸語の故地は中国東北部の、いわゆる旧満州(とくに遼寧省・吉林省)・内モンゴル辺りです。

かの地では独自に雑穀栽培が発達していた(G・シュラク)といわれていますが、拙著『新・みんなの蕎麦文化入門』で紹介した遊牧民の農業がその景色であると思います。

そして、一部の人々は紀元前3500年より前ごろ、栽培雑穀を携えて東方の朝鮮半島、後の高句麗一帯に到達しました。これが朝鮮半島における農耕民の起源だといわれています(P・ベルウッド)。東へ向かった理由は、南の中国文明、北(シベリア)の寒冷地、西(モンゴル)の乾燥地帯を避けたためと考えられます。

おそらく雑穀のなかには蕎麦も入っていたのでしょし、その栽培蕎麦が縄

文晩期に日本列島へ上陸したのです。これが稲作前に栽培蕎麦が日本に伝来した理由です。日本農業史から見ますと、「前農業(雑穀)」の伝来ともいえる画期的な出来事です。

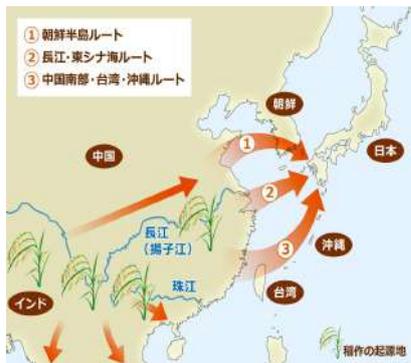
そのころの日本列島では九州縄文語、琉球縄文語、裏日本縄文語、表日本縄文語が使われていた(小泉保)といわれています。



【縄文語】

そしてこの後に、後世の日本にとって**世紀の出来事**が起こるのです。

半島人の一部が、中国の圧迫からなのか、環境変化のためなのか、より肥沃な土地を求めてなのか、**稲作民**として九州北部への大規模移動を開始したのです。ここでアルタイ語は、チュルク語派、モンゴル語派、ツングース語派、日本語などに分岐するわけです。時期は今から2500年前までにといいことらしいです。それゆえに、**日本語の起源は、朝鮮半島青銅器時代前期ごろ**にあるとユハ・ヤンプネンらは唱え、言語学者の村山七郎も李基文も古代日本語と高句麗語は近いとみています(『日本語系統論の現在』)。



【稲の伝来ルート】



【日本へ渡来した青銅器の起源地】

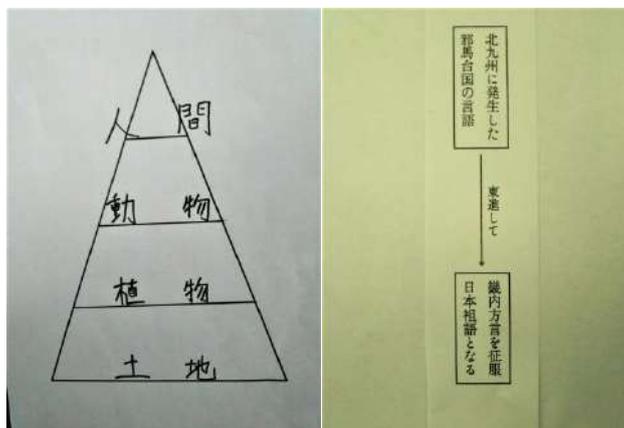


【銅鐸】

大規模渡来した彼らは先住の縄文晩期人との混血によって、現在の日本人の祖となり、そして**弥生語(渡来語+九州縄文語)**が生まれました。とすると日本語ルーツ解明の手がかりは高句麗語あたりにあるということになりますが、残

念ながら朝鮮は新羅(新羅語)によって統一され、滅亡した高句麗語の研究はなかなか難しいところです。

こうして、肥沃な土地があれば、栽培穀物が育って動物や人々が集い、ムラやクニへとなったわけです。つまり日本の歴史は「**本格農業(稲作)**」によって「**農は国家なり**」の道を歩み出したのです。



【農は国家なりの基本概念】 【邪馬台国東進】

やがて弥生語は、大和語となって未来の日本語へと成人化していきますが、そのためには九州の邪馬台国の近畿への東進(服部四郎)という史実が欠かせないことになります。

こうして、あらためて「日本人がどこから来たのか?」からをしてみると、日本人には**縄文晩期の前農業人(蕎麦栽培)**と**弥生時代の農業人(稲栽培)**の**二つの血が流れている**ことに気がつきます。

☆日本の国字

「日本語の名詞は漢字でできているものであり、その名詞が文章表現の意味の中心である。」

比較文化論研究者の柳父章(桃山学院大学名誉教授:『近代日本語の思想』)がこう述べています。

その漢字は中国から伝来し、字を持っていなかった日本の国字となりました。さらに平安時代になりますとその漢字を崩して「ひらがな」が考案されて「漢字」と「ひらがな」は一對となって、**名詞は漢字で、動詞・形容詞は漢字とひらがなで書くのが日本語文の基本**となったのです。

では、「カタカナ」は何でしょうか。書家の石川九揚は、「漢字やひらがには書体としての基準があるが、カタカナにはそれが無い」と述べています。言い換えますと、正しい字の形がないのです。したがって、われわれの祖先はカタカナに対して、文字としては半人前の地位しか与えません。ですから「片カナ」と呼ばれており、ルビとか、擬音擬態語とか、外来語などに使われているのです。

ちなみに、ルビというのは面白い方法です。中国字と日本語の橋渡しをしているわけですが、こんな発想は他の国では見られません。

こうして、私たちは赤い茎、緑の葉、白い花、黒い実を持ったあの穀物を「そば」

と呼び、字は「蕎麦」と書くようになりました。

こうした流れを正しく認識することも**食育**ではないかと思えます。

ところで、私たちが文章を書く場合、困っていることがあります。

天武天皇以来、米を主食としてきたわが国では、下記のように稲・米・飯の使い分けができています。言葉の豊かさで米文化の高さを表しているともいえます。

一方、蕎麦は植物から食物まで蕎麦です。このことが聞く者を惑わせています。したがって食物(麵)の場合は、江戸時代に呼ばれていた【蕎麦切】を復活させることを提案したいと思います。

ご承知のように和食の基本は「割烹」つまり「切って、煮る」ところにあります。そして和食の基本に忠実な食べ物が、「切って、茹でる」蕎麦です。蕎麦麵を【蕎麦切】とするには最適かと思えます。

野生稲	植物	野生蕎麦
栽培稲	作物	栽培蕎麦
米	食糧	玄蕎麦
精米	食品	蕎麦粉
飯	食物	蕎麦 ⇒ 【蕎麦切】

☆未来のために

最後に、もう一度街を歩いてみましょう。

見回しますと、店名などは英字の氾濫です。この傾向は店名ばかりではありません、現代の重要な言葉「compliance」「informed consent」「gender」「SDGs」・・・など、英語をそのまま使うことが多くなりました。

振り返りますと、日本という国は上古からそうでした。古き時代、文字や言葉の宝庫である宗教経典はたいていの国では自国語に翻訳しようと努めてきました。たとえば仏教経典においては、当初は仏陀の故国の言葉、いわば北インド地方の方言で記されていました。それが公用語のサンスクリット語に翻訳されてから仏教は国教に格上げされました。また中国は6世紀に漢訳して中国の宗教にしました。

しかるに日本は、なぜか輸入原語のまま「般若波羅密多時・・・」と難解な文言で、ただ唱え続けてきたのです。

このような経典の扱い方が日本の象徴的な姿です。

こうした流れのなかの英語使用傾向について、言葉や文字はコミュニケーションの手段だから、グローバル時代には世界語に等しい英語表現が必要だという声があります。しかし大昔の上古のことを考えますと世界語云々が正解だとは言いがたいところがあります。ですから、その行為は強者の論理の統一化に従った姿、いわば危ういものであり、また多様な民族の固有言語への敬愛心が薄いからだという意見になるわけです。

冒頭の「中華蕎麦」の誤用や上記の英字の氾濫は、心理学者の河合隼雄が指摘する日本人の「中空」(=中身は空っぽ、何も考えないという意味)ゆえかどうかは分

かりません。もし日本人中空説が事実だとしましたら、それゆえに自国の言葉や文字のことを考えるようになれば、‘中空’から脱することができることとなります。

繰り返しますが、言葉や文字は民族に属します。

たとえば、蕎麦つゆや醤油を仮に「sauce」と訳しましたら、固有の食文化の否定につながります。やはり、つゆは tsyu であり、醤油は shoyu であって、sauce ではありません。無理な訳で、国固有の食文化を外国食文化の範囲に封じ込めてはいけないと思います。そこに日本語が減じようとする気配があるのです。

ただそうであっても、未来には世界語または地球語が必要な世紀が訪れるでしょう。でも今は、その時期ではないと思います。もうちょっと遠い未来の、たとえば地球外生命体の存在が明らかになるところには、未来の地球人は一つにならざるを得ません。

その日のためにも、いま私たちがなすべきことは各々の国の国語国字の正しい認識と尊重です。それは和食文化、日本蕎麦文化を愛することの基本として大切だと思います。

《参考》

ほしひかる『新・みんなの蕎麦文化入門』

P.ゴージャン『我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか』

海部陽介『日本人はどこから来たのか？』

ルーカ&フランチェスコ・カヴァリ・スフォルツァ『わたしは誰、どこから来たの？』

産経新聞生命ビッグバン取材班『日本人の起源』

ピーター・ベルウッド『農耕起源の人類史』

小泉保『縄文語の発見』

服部四郎『日本語の系統』

アレキサンダー・ボビン/長田俊樹:共編『日本語系統論の現在』

黒田正子『語源たどれば京都』

柳父章『近代日本語の思想』

河合隼雄『中空の思想』

以上

